

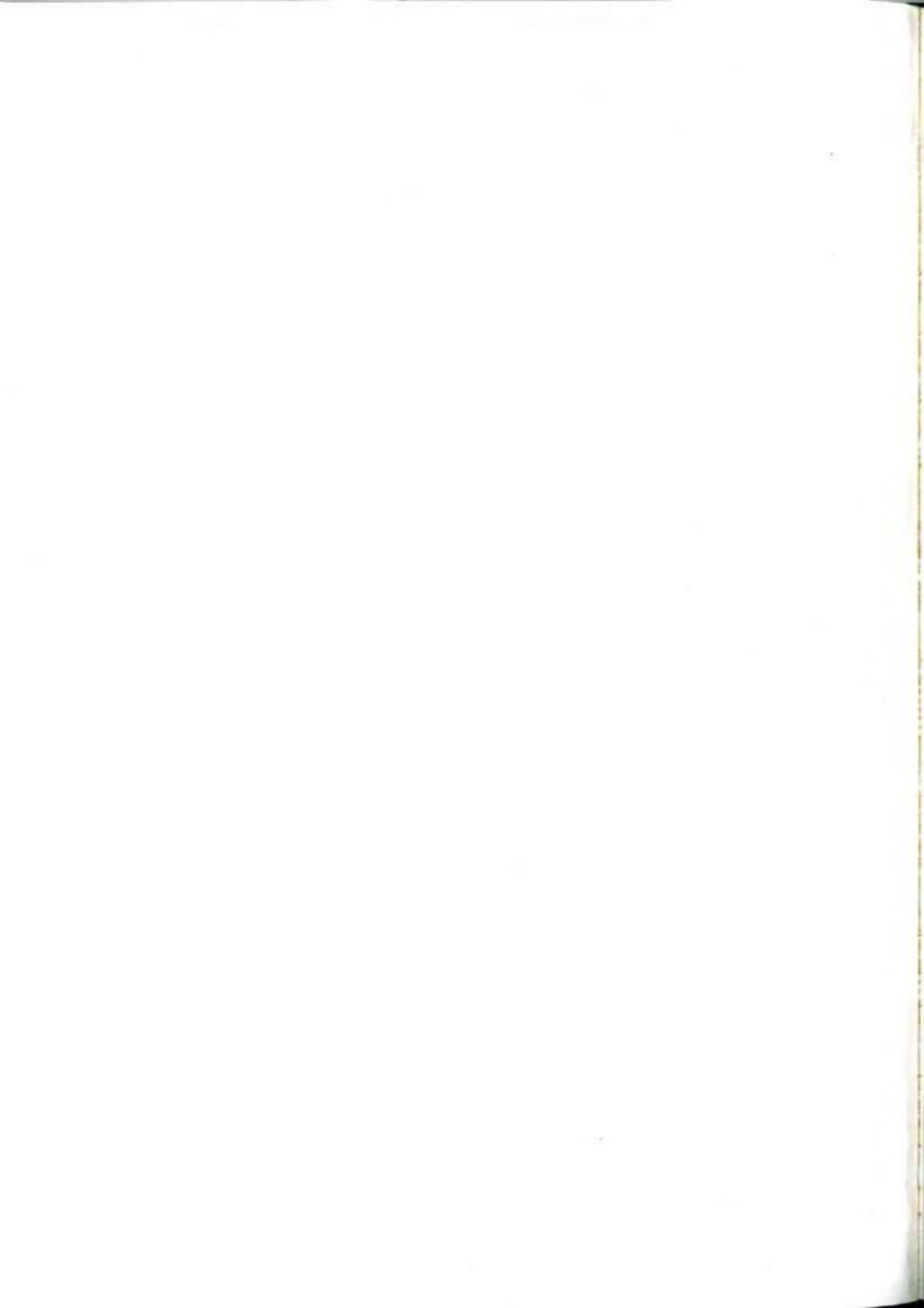
島原市文化財調査報告書 第11集

森 岳 城 跡

島原法務総合庁舎増築に係る埋蔵文化財発掘調査報告

2006

長崎県島原市教育委員会







島原市文化財調査報告書 第11集

森 岳 城 跡

島原法務総合庁舎増築に係る埋蔵文化財発掘調査報告



2006

長崎県島原市教育委員会

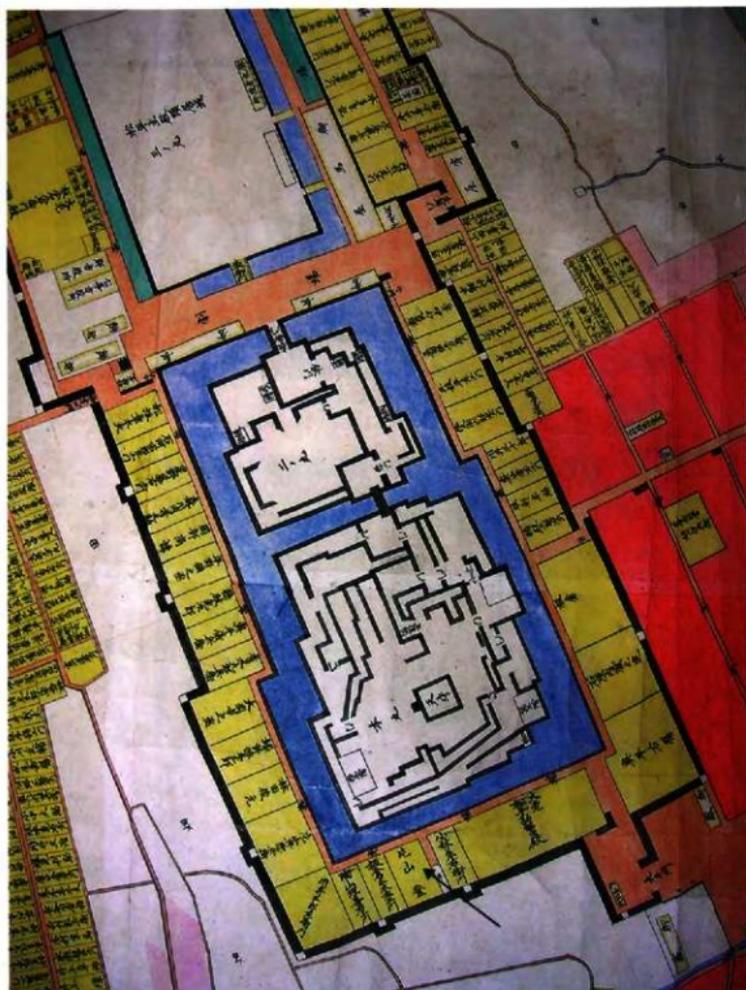




南壁最深部土層



南壁土層



調査地付近の絵図
「嶋原藩士屋敷圖」(松平文庫蔵)

序 文

一般には、島原城として知られる森岳城は、島原のシンボルとして市民はもとより、観光客にもその白亜五層の天守閣が親しまれていますが、城全体の規模は東西190.5間（344.8m）、南北660.5間（1,195.5m）という巨大な城郭です。

この広大な城郭において、島原高校体育館の建替えに伴う発掘調査など、近年、発掘調査のメスが入れられるようになりました。

この度、島原法務総合庁舎の増築に係り、遺跡の取り扱いの協議を受け、埋蔵文化財の発掘調査を行い、一定の成果を挙げることができました。

この島原法務総合庁舎をはじめ長崎県島原振興局や島原図書館など官公庁が立ち並ぶ一角は、大身の家臣の屋敷があったところですが、未だ調査例はなくその意味では、非常に貴重な調査であったといえるでしょう。

森岳城の考古学的な研究は未だ緒についたばかりであり、今後、調査例の増加を待って一層の検討を加えて行きたいと存じます。

最後になりましたが、この度の調査にあたり、全面的なご理解とご協力をいただきました国土交通省の関係の皆様から感謝申し上げます。

平成18年3月

島原市教育委員会
教育長 宮崎 金助

例 言

1. 本書は、鳥原法務総合庁舎の増築に伴って実施した長崎県鳥原市城内一丁目1204番地の森岳城跡の発掘調査報告書である。

2. 鳥原市教育委員会が調査主体で、調査期間は次のとおりである。

確認調査 平成17年8月24日～8月31日 6.25㎡

本調査 平成17年12月21日～12月26日 19.35㎡

3. 調査関係者は下記のとおりである。

鳥原市教育委員会	教育長	宮崎 金助
同	社会教育課課長	平尾 明（平成17年12月31日まで）
同	社会教育課課長	松本 正（平成18年1月1日から）
同	社会教育課主査	土橋 啓介（調査担当）
長崎県教育庁	学芸文化課係長	古門 雅高（現場指導）

4. 本書で用いた方位は全て磁北である。

5. 本調査及び本書の作成費用はすべて国土交通省が負担した。

6. 本書に関する遺物、写真、図面については、鳥原市教育委員会が保管している。

7. 遺構、遺物の実測、写真撮影、トレース並びに本書の編集は土橋による。

本文目次

第1章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査	
第1節 調査に至る経緯と確認調査	4
第2節 本調査	6
第3節 遺物	10
第3章 史料にみる調査地	11
第4章 まとめ	12

挿図目次

森岳城跡位置図	とびら
南壁土層	巻頭
調査地付近の絵図【嶋原藩土屋敷圖】(松平文庫蔵)	巻頭
第1図 周辺遺跡地図 (S = 1/50,000)	3
第2図 調査区設定図 (S = 1/50)	4
第3図 調査地位置図 (S = 1/2,500)	5
第4図 南壁土層図 (S = 1/30)	7
第5図 確認調査時検出の石列平面図 (S = 1/10)	8
第6図 本調査時検出の石列平面図 (S = 1/10)	8
第7図 石列配置図 (S = 1/50)	9
第8図 出土瓦図 (S = 1/3)	10

表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表……………	2	第2表 土分明細帳にみる片山登……………	11
------------------	---	----------------------	----

図 版 目 次

図版1……………	14
----------	----

確認調査

- | | |
|----------------|-----------|
| 1 調査地近景（南から） | 2 検出された石列 |
| 3 検出された石列（上から） | |

本調査

- | | |
|--------|---------|
| 4 作業状況 | 5 近代の遺構 |
|--------|---------|

図版2……………	15
----------	----

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 検出された石列（上から） | 5 東壁土層 |
| 2 検出された石列（南から） | 6 石群検出状況 |
| 3 検出された石列（南東から） | 7 調査区（調査終了時） |
| 4 南壁土層 | |

図版3……………	16
----------	----

出土遺物

- | |
|-------|
| 1 出土瓦 |
|-------|

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

森岳城は雲仙岳を主峰とする島原半島の東側の扇状地先端部の緩傾斜地に立地する。

本丸は、もともと小高い丘である森岳を利用して築いてあるために森岳城の名がある。市内には、遠い過去の火山活動による流山と見られるこのような小丘が多い。本丸の標高は29mである。

森岳城は、海との連絡をも視野に入れて築城されているため、海までの距離も近く外郭線から300mほどである。

城の北側は、以前は沖田原と言われる田園であったが、現在、新道が東西方向に開通し都市化が進んでいる。東側は、築城と共に東南部に商家街を築いたほかは北部同様田園が広がっていたが、明治以降、鉄道や国道の開通により都市化が進んでいる。西側は、下級武士の住まいとして著名な「武家屋敷」が広がる一帯で、現在も宅地として利用されている。南側は築城時以来の商業地帯で、現在も島原市の商業の中心地帯である。

大手門は南東部にあり、そのすぐ南側には大手川が眉山の麓から東へと流れ外堀的に活用されていたものと推測される。

この河口には北から南へと長い砂嘴が延び、この穏やかな入江の内側には塩田や倉、藩の船手が設けられていた。

この入江は、後に干拓が進められ（現新田町）現在の地形となる。

なお、1792年の島原大變で城下南側は地形が大きく変っているが、これについては割愛する。

第2節 歴史的環境

島原市域（平成17年、有明町との合併前）には64箇所の遺跡が知られるが、大部分が北部の三会地区と南部の安中地区に所在する。これは、市域の中央に眉山が存在し、1792年のいわゆる島原大変でこの山の一部が崩壊し土砂で覆ってしまったためである。

縄文時代の礫石原遺跡や弥生時代の景華園遺跡という著名な遺跡がある一方、上記のとおり、現在の中心市街地にはほとんど古代遺跡が見当たらない。

島原が古来、有明海の海上交通の拠点であるため、古代駅路の野鳥駅を島原に比定する考えもあるが、有力な物証は無い。

降って、歴史資料においては島原という地名の初見が宇佐大鏡に見られるほか、中世の史料に散見される。

戦国時代にはフロイスの日本史にも良港を擁する町として記載される。当時、高原には有馬氏麾下の在地土豪島原氏が「浜の城」に拠っていたとされるが、1584年の島原合戦（沖田畷合戦）時に佐賀方に属したため滅亡。こののち島原は、有馬領となるが、1614年有馬直純が日向延岡に転封したのち、有馬領は鍋島・松浦・大村三氏の委任統治領となる。島原は鍋島氏の統治下に入ったが、鍋島氏は「浜の城」を拠点として整備したようで「浜の城は、圓のため堀をほり土手を築きなされ候により、肥前堀と申すなり」（『肥前国有馬古老物語』文献1所収）とあり、森岳築城まで「浜の城」が機能していたことが看取できる。

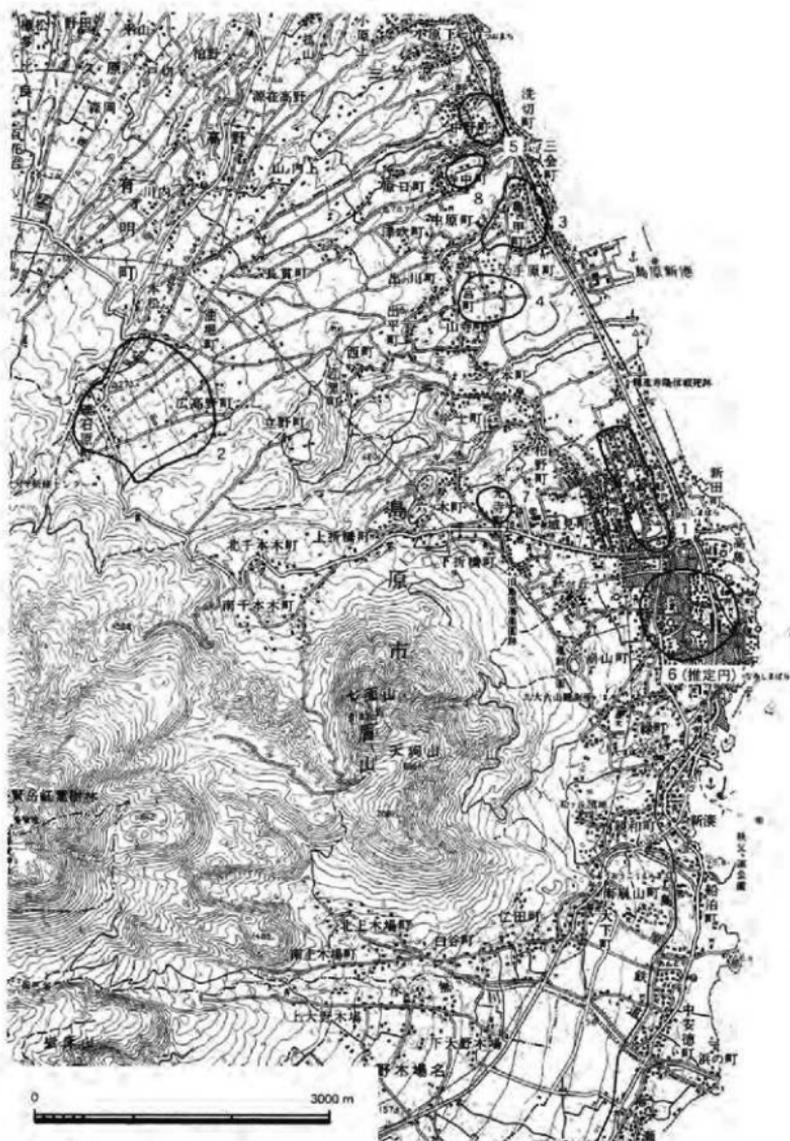
1616年、大坂の役の功により松倉重政が旧有馬領に入封し、1618年、領地の中心として、森岳城の築城を開始した。この森岳築城により、以後島原が島原半島の政治、経済、文化の中心となった。

松倉氏は、次の松倉勝家の代に島原の乱が起り責を負って改易。譜代の高力氏が入封するもこれも二代で改易。1669年、譜代の松平忠房が福知山から入封し、途中、宇都宮の戸田氏と交替するも再び島原に入封して幕末を迎える。

明治以降、森岳城の敷地は、官公庁や学校として利用され、郡役所や旧制中学校が建てられた。現在でも国や県の関係機関や県立島原高校、同島原商業高校、市立第一中学校、同第一小学校が立地し、また、三の丸以北は住宅地となっているが、城の遺構はそれほど破壊されておらず、外郭線をたどることが可能である。

番号	遺跡名称	所在地	種別	立地	時代
1	森岳城跡	島原市城内一丁目・二丁目	城跡	平野	近世
2	礫石原遺跡	島原市礫石原町	集落・墳墓	丘陵	縄文
3	畑中遺跡	島原市中原・亀の甲・御手水町	遺物包含地	平地	縄文～中世
4	稗田原遺跡	島原市稗田町	遺物包含地	平地	縄文・弥生
5	景華園遺跡	島原市中野町高城元	墳墓	海岸段丘	弥生
6	浜の城跡	島原市新町一丁目	城跡	平地	中世
7	丸尾城跡	島原市本光寺町	城跡	平地	中世
8	寺中城跡	島原市中野町城の鼻	城跡	丘陵	中世

第1表 周辺遺跡地名表



第1图 周边遺跡地図 (S=1/50,000)
(文献3より引用)

第2章 調 査

第1節 調査に至る経緯と確認調査

国土交通省九州地方整備局長崎管轄事務所では、管内の島原法務局総合庁舎にエレベーター棟の増築を計画しているので、周知の埋蔵文化財包蔵地であるか確認して欲しい旨の連絡が島原市教育委員会にあった。

教育委員会では、同所が周知の埋蔵文化財包蔵地森岳域の中にあり確認調査が必要と回答し、平成17年8月24日から31日に2.5m四方の試掘壕を調査を設けて行った。

調査後、すぐに試掘壕東側に南北に通るパイプや配管が発見され、また東北部には攪乱が見られたため掘り残し、結果的に想定以上に狭い範囲の調査となったが、南壁東側で近代と思われる石列が検出され、さらに地表下1.3mで江戸時代のもと思われる石列を検出した(第6図、図版2・3)。

この石列の検出を受けて、長崎県学芸文化課と協議したところ、本調査が必要との指導を受けたので、再び国土交通省九州地方整備局長崎管轄事務所と協議して本調査を行うこととなった。



第2図 調査区設定図 (S=1/50)

第2節 本調査

確認調査の結果を受けて、設計変更による遺構の保護も協議したが、変更できないとの結論に至ったので、エレベーター棟の敷地5m四方の内、安全のため庁舎に接する西側の部分（幅1m）とマンホール設置部分を除く19.35㎡の調査を平成17年12月22日から26日にかけて行った。

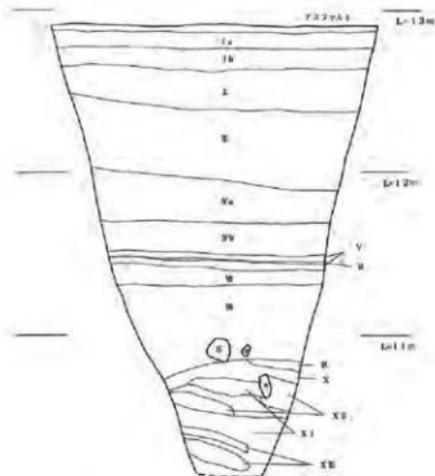
試掘調査の結果、地表から50～60cmは整地層（バラス）と分かっていたので表面のアスファルトと共に機械で除去してから掘り進めた。

Ⅲ層の黄褐色土中に、土管様のものが埋設されており、確認調査時近代のものと推測していた石列と、ほぼ同じレベルであった（図版1-5）。図化した後、除去して掘進した。

次に確認調査時に江戸期のものと推測していた石列であるが、本調査でも前回分の東側で検出された（第6図，図版2-1～3）。石は大きいもので長辺30cm程度、上下2段になっている部分もあるが、きれいに面取りしているという感じではなく、何らかの境界のようにも受け取れる。この石の検出面が江戸期の地表と推定するが、今回の調査範囲では、他に遺構は見出せなかった。遺物は、この面の上に石に挟まれつぶされた状態で壘が出土している。

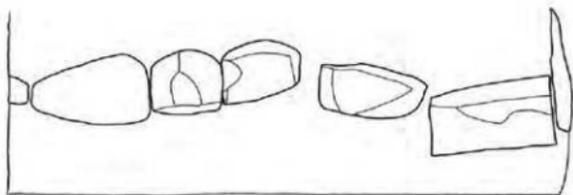
さらに城の基礎構造を探るため、深掘りを実施。その結果、下部構造は、大小混合の礫層（Ⅳ層）が80cmほどあり、その下に、黄色や黒褐色、赤色などの色調が異なる硬く締められた土が互層のようになっている存在していた。なお、礫層の中には、30cm程の石が固まっている所もあった（図版2-6）。

地山まで到達できなかったが、地表下約3mほどになり調査幅が狭小で危険となったため、掘進を断念し調査を終了した。

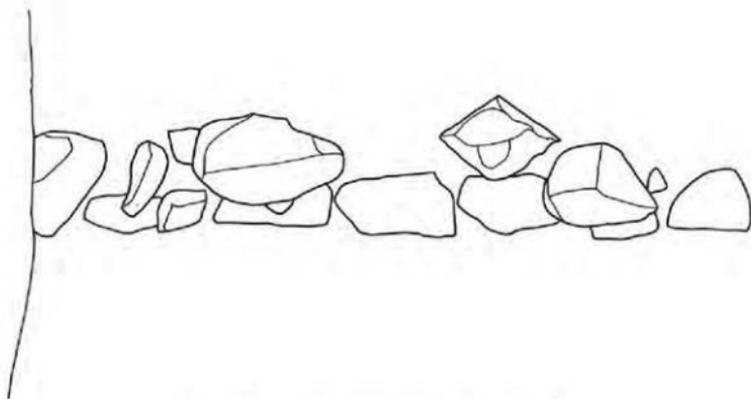


第4図 南壁土層図 (S=1/30)

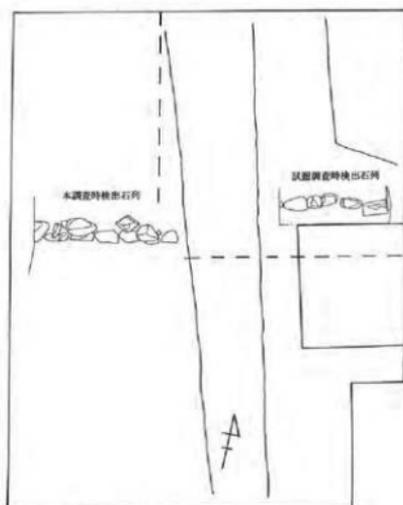
- | | | |
|------|----------------------------|-------------------------|
| I a | 灰色バラス | } 整地層 (II・III層は近現代遺物含む) |
| I b | 黄色バラス | |
| II | 茶褐色土 | |
| III | 黄褐色土 | |
| IV a | 暗黄褐色砂礫土 | 近世遺物有 |
| IV b | 暗黄褐色砂礫土 (粗粒) | 近世遺物有 |
| V | 黄色砂礫土 | |
| VI | 黒色土 (V層中に帯状に薄く入る) | |
| VII | 黒色土 (粒が細かく湿った感じ) | |
| VIII | 礫層 (下層は大きな礫, 30cmほどの石も混じる) | |
| IX | 黄色土 | |
| X | 暗黄褐色土 | |
| XI | 黒褐色土 | |
| XII | 赤色硬質土 (非常に硬く締められた感じ) | |
| XIII | 黄色硬質土 (同上) | |



第5図 確認調査時検出の石列平面図 (S=1/10)



第6図 本調査時検出の石列平面図 (S=1/10)



第7圖 石列配置圖 (S = 1/50)

第3節 遺物

陶磁器片等が確認調査・本調査合わせて200点ほど出土している。

Ⅱ・Ⅲ層中では近現代遺物，Ⅳ層では江戸期の遺物が出土した。特にⅣ層中では付着物ある瓷片が出土しているが現在整理中である。

同じ層の他の出土品としては，瓦がⅣb層から出土している（第8図）。軒平瓦で，文様区に均整唐草文をもつ。中心飾りは肉太の三葉で，唐草は左右に2転する。



第8図 出土瓦図 (S=1/3)

第3章 史料に見る調査地

旧島原藩主松平家は忠房など好学の藩主が和漢の典籍類を収集していた。今に伝わる「松平文庫」(市指定文化財)約1万点がそれである。併せて郷土史料も多数所蔵しており、絵図「島原藩土屋敷圖」(口絵参照)もその一つである。

図に記してある由来には、原因が中川熊勝により昭和7年に完成したこと、その詳細なことに史料の価値を認めた当時の島原尋常小学校校長鉄吉(島原半島史の編著者)が同10年に複写したとある。また「元治二年ノ調査ニ依ル」とあり1865年現在の藩士名が記載されているが、これにより調査地付近が「片山登」邸付近と比定される。

同じく松平文庫所蔵の「士分明細帳」によると「片山登」の人名が元文2年(1737年)以降明治2年までの歴代、掲載されている(第2表参照)。100石取の上層家臣であり、役職は御中小姓などから始めて、町奉行などの要職に付いていることがうかがえる。

片山登 元右衛門卜同人ト見ル	片山吉右衛門 登伴	片山登 吉右衛門養子 実佐用権之進二男
元文2年(1737年)新知100石	宝暦8年(1758年)御次番	天明2年(1782年)跡式 御中小姓
御広間番	御通番	御次番
御船奉行	御小納戸詰	御通番
御旗奉行	登跡式100石	御馬廻
大横目・御旗奉行	御馬廻	御小納戸
物頭	天明2年没(1782年)	並取次
町奉行		大横目
寺社奉行		公事方大横目
御取次		町奉行各
安永7年(1778年)没		御側役格
		天保9年(1838年)没
片山登 登伴	片山登	片山登 登養子 実岡部武兵衛弟
文化11年(1814年)御中小姓	天保13年(1842年)御中小姓	万延元年(1860年)亡父跡式100石 御中小姓
御通番	御通番	御馬廻
御普請方上見ヶ締	御馬廻	御普請方上見ヶ締
御勝手方勘定奉行見習	武具奉行介	銀札方頭取介
支配御預勘定奉行本役同様相勤候様	武具奉行	銀札方頭取
御勝手方勘定奉行	安政6年(1859年)没	御勝手方勘定奉行介
御馬廻		御勝手方勘定奉行
物頭		赤旗隊中隊司令
物頭格御馬廻		
町奉行助勤配下御預		
勘定奉行席町奉行		
奥大目付介		
安政2年(1855年)没		

第2表 士分明細帳にみる片山登
(氏名の下欄は就いた職名)

第4章 ま と め

鳥原藩土屋敷圖によると、幕末の片山登邸付近と推測される所であるが、それを証するような遺物は発見できなかった。

今回の調査は、19.25㎡という小規模なものであったが、性格不明なもの江戸期と思われる石列と、その下部の城の基礎構造が検出され、貴重な知見が得られた。

調査箇所は、森岳城の南端部付近に当たるが、本丸から堀を挟んだ直下にあり大身の家臣の屋敷が並んだところである。

南端部の石垣は、大手からはほぼ現存しており、鳥原振興局以東が改変されているものの、よく旧状を残している。1章で記述したとおり森岳城は、森岳という小山を用いて築いた城だが、今回の調査でこの南端部付近が山の削りだしでなく、盛土で築かれたことが判った。

今回、最深部で地表から2.8mの深さまで掘進したが、これは南側の石垣の外、鳥原振興局の立地面と同じ深さであった。

今後、森岳城の基礎構造がどのようになっているか、土木構造物としての城がどのように築かれたかという問題意識を持って、考古学的な調査を継続することが必要であろう。

【参考文献】

- 1 林 鏡吉編 1954『鳥原半島史』長崎県南高来郡教育会
- 2 本田秀樹編 2002『森岳城跡』長崎県教育委員会
- 3 本田秀樹編 2003『森岳城跡Ⅱ』長崎県教育委員会

圖 版

確認調査



1 調査地近景（南から）奥に見えるのが本丸西の櫓



2 検出された石列
壁面のもが近代、下のものが近世と推測



3 検出された石列（上から）

本調査



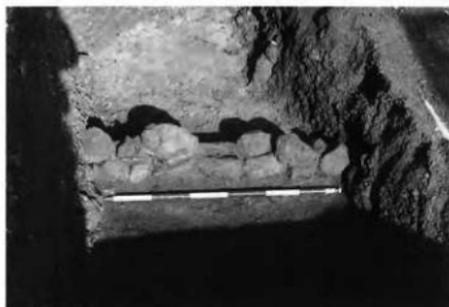
4 作業状況



5 近代の遺構



1 検出された石列（上から）



2 検出された石列（南から）



4 南壁土層



3 検出された石列（南東から）



6 石群検出状況



5 東壁土層



7 調査区（調査終了時）

出土遺物



1 出土瓦

報告書抄録

ふりがな	もりたけじょうあと							
書名	森岳城跡							
副書名	鳥原法務総合庁舎増築に係る埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	鳥原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	土橋 啓介							
編集機関	鳥原市教育委員会							
所在地	〒850-1492 長崎県鳥原市有明町大三東戊1327番地 TEL0957-68-5473							
発行年月日	西暦2006年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 緯度	東経 経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
森岳城跡	長崎県 鳥原市 城内一丁目	42203	3			2005年 12月22日 ～26日	19.25	鳥原法務 総合庁舎 の増築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
森岳城跡	城跡	近世	石組遺構	陶磁器・瓦				

島原市文化財調査報告書 第11集

森 岳 城 跡

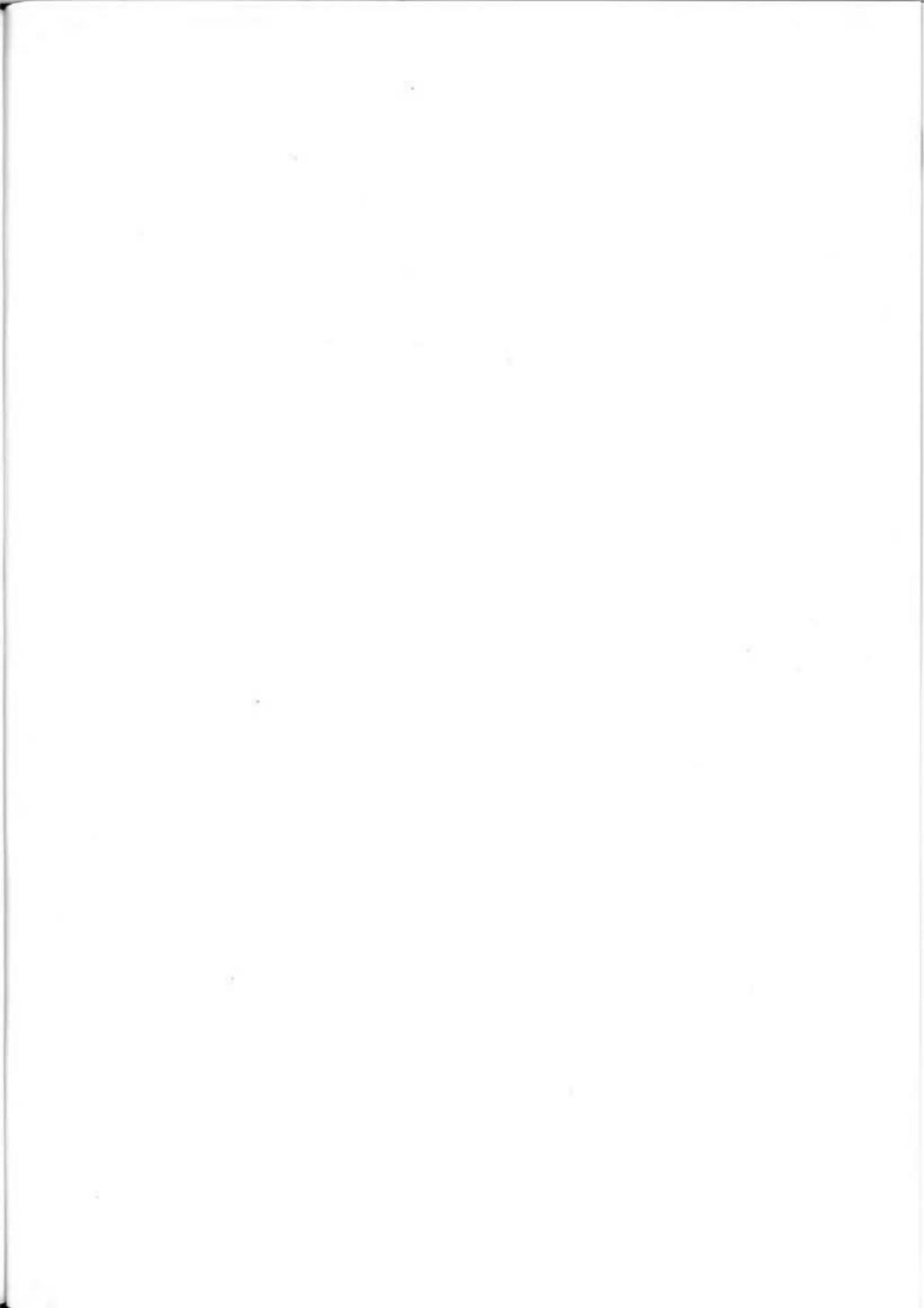
平成18年3月

発行 島原市教育委員会

〒859-1492
長崎県島原市有明町大三東戊1327
TEL 0957-68-5473

印刷 株式会社 昭和堂

〒854-0036
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957-22-6000







森 岳 城 跡